

現代日本詩人全集

全詩集大成

第十一卷

三好達治	丸山薫	田中冬二	立原道造	伊東靜雄	津村信夫
------	-----	------	------	------	------

創元社 刊

全詩集
大成

現代日本
詩人全集

11

第一回
配本

定價 450 圓

昭和 28 年 11 月 20 日 發 行

著者代表 ^み三 ^{よし}好 ^{たつ}達 ^と治

發行者 小 林 茂
東京都中央区日本橋小舟町2ノ4

印刷者 中 内 佐 光
東京都千代田區飯田町 1ノ23

發行所 株式
 會社 創 元 社
東京都中央区日本橋小舟町2ノ4
(大阪市北區繩上町45)
電話 (茅場町) 1734, 2064, 4083
振替・東京 1565, 大阪 57099

萬一落丁亂丁がありました
たら御取り替え致します

印刷所 曉印刷株式會社
製本所 鈴木製本所

現代日本
詩人全集
第十一卷

目次

三好達治

自傳

六 艸千里

五 砂の砦

一〇六

測量船

三 一點鐘

三 日光月光集(上)

二六

南窓集

三 朝菜集

七 同 (下)

二六

閑花集

八 合本一點鐘

八 朝の旅人

三三

山果集

四 花の窟

八 駱駝の瘤にまたがつて

三三

春の岬

四 故郷の花

五

丸山 薫

自傳

一四 物象詩集

一七 水の精神

二〇四

帆・ランプ・鷗

三 涙した神

一九 仙の境

二〇三

鶴の葬式

二 丸山薫詩集

一八 花の芯

二二

幼年

一三 點鐘鳴るところ

一八 十年

二二

一日集

一六 北國

一六 青春不在

三三

田中 冬二

自傳

二四 花冷え

二六 山の祭

三三

青い夜道

二五 故園の歌

二五 春愁

三三

海の見える石段

二六 橡の黄葉

二二 山國詩抄

三九

山 鳴 三六 菽 麥 集 三二〇

立 原 道 造

小 傳 三三 曉と夕の詩 三四
萱草に寄す 三五 優しき歌 三五

伊 東 靜 雄

小 傳 三六 夏 花 三七
わがひとに與ふる哀歌 三七 春のいそぎ 三八
反 響 三六
伊東靜雄詩集 三九

津 村 信 夫

小 傳 三九 父のゐる庭 四二
愛する神の歌 三九 或る遍歴から 四三
さらば夏の光りよ 四五

解 說 (伊藤信吉) 四七
編集後記 四七

裝 幀 恩 地 孝 四 郎

目次凡例

一、巻頭の總目次は、本巻收録詩人の詩集全冊をその刊行順に掲げた。

一、各詩集の内容目次は詩人ごとに一括して、その冒頭に収めた。

一、本文中の或る詩集については、原詩集の内容をそのまま、そっくり収めていないものがあるが、それは左の二つの理由によるものである。

(1) 著者の意向乃至その他の理由により削除する必要を生じた場合。

(2) 前掲詩集からの再録詩篇である故、重複をさけるために削除した場合。

但し、目次の上ではその單行形態を完全に再現せしめるため、本文の内容とは關係なく、單行詩集ごとにその全内容を明示することにした。方法左の如し。

(イ) *印は著者の意向乃至その他の理由により削除されたことを意味する。

(ロ) ・印は本書本文中の他の箇處に既出のため、削除した詩篇又は詩集名を示す。

(ハ) 再出詩篇が連續している場合又は或る章題下に再編されている場合、當該詩篇群は・印のもとに迫込みにて組込むことにした。

三好達治

雪

太郎を眠る太郎の墓根

に雪ふりつむ

次郎を眠る次郎の墓根

に雪ふりつむ

自傳（自分のこと）

明治三十三年八月二十三日雷鳴の午後に生る。生來偏固世に處し難からうとはやく両親の憂ふところであつた。その上病身で學校も休み休みであつた。學業は從つて芳ばしくなく、當人もいつかう自信がなかつた。家庭は半工半商のやうなことをやつてゐて、學藝には縁故がなかつた。小學を終る頃から文藝書に親しみはじめたのは、先生と級友との感化であつた。府立市岡中學に入る。いささか不良性を帶ぶ。後陸軍幼年學校を経て士官學校に進む。しかしながら軍人精神に於て缺くところあり、兼ねて立身出世の志望をいだかず。士官學校半途退學、スペイン語を學ぶ、ブラジル入殖の希望あり。希望は家人の阻むところとなり、たまたま第三高等學校に受験。三高文科丙類を経て東大フランス文學科に學ぶ。學藝に専心ならず、同人雜誌「青空」に参加諸作を發表、この方はいささか熱心に考究今日に及んでゐる。これより先「ホトトギス」派俳諧に親んだことがある。十三四歳頃から十數年に及んだが社中に加はらずひそかに内證ごとのやうに獨學、つひに物にならず。その始めは近隣にその派の俳人のゐたのに見倣つたものであつた。この摸倣癖は當人に何か本然のものであつて、當人に於ては今日なほ半ば怪訝にたへず、且つ半ばはなつかしい思出の事情にある。後高等學校に於ては級友に短歌を嗜むものがあつてこれに見倣つて歌作に耽つた。専ら若山牧水に傾倒した。また級友に新詩を試みるものがあつた。後に「四季」に同人であつた丸山薫君である。丸山君には欣賞すべき早成の才があつて當人はまたこれに見倣ふことを忘れなかつた。別段本腰を入れてやるつもりでも何でもなかつたが。雜誌「青空」には梶井基次郎、中谷孝雄、外村繁、淀野隆之等の諸君が同人であつ

た。その頃まで氣まぐれな摸倣癖に終始してゐた當人は、あとから仲間に加へてもらふことになつていささか緊張した。緊張せざるを得なくなると仕事にもまた興味が増した。仕事といふほどの自覺をその頃まだもたなかつたのが追々さういふ自覺をもつやうになつた。その前後、大正十三年頃から數年はやたらに新刊舊刊の詩集を耽讀し漫讀した。萩原朔太郎の「月に吠える」「青猫」その他は最も愛讀した。當人の例の摸倣癖はむろん活潑に觸手を動かししたが、この際はどうにも始末が悪くかつかうがつかないのに苦しんだ。萩原さんのはあれは學んで學びやうのない、學び甲斐のない骨法なのが最初からうすうす解つてゐたが、諦めのつくまでには時間がかかつた。同時に室生犀星の初期の詩風にも、摸倣癖は本然的に働きかけた。「測量船」の初期の詩風にいくらかその跡をとどめてゐるのを、いつぞや萩原さんから指摘をうけた。指摘をうけるまでもなく當人にその自覺があつたから赤面し、閉口した。さうして甚だ窮屈を覺えたが、なほ當人に餘力がなくてどうすることもできなかつた。その後季刊誌「詩と詩論」が昭和何年かに創刊されて、それに北川冬彦君の斡旋で加つたじぶんには大いに自己流儀を發揮したい存念であつたが、そのじぶんのものは後年思ふに、その以前しきりに愛讀した堀口大學譯集「月下の一群」の影響下におほかたは屬するものであつた。これは當人自らただ今指摘しておいてよろしいやうに覺える。

先頃立原道造君、伊東靜雄君、野村英夫君らの詩集を讀みかへしてみて、これらの俊秀たちの仕事ぶりが、當人の企てんとして企てえず、爲しとげんとして爲しとげえなかつた境地に、既にずつと前方に經過し進み入つてゐるのを覺えた。彼らは既に夭折してない。さうして當人は碌々と後方にひとり残り残されたのを覺えた。またこのほどは例の本然の摸倣癖もまたうすらとぼけて、新意を振ひ起す氣力に缺けてゐるのを覺える。當人彼らに學びたいのだが。

詩集 測量船

春の岬	一五
乳母車	一五
雪	一五
鶯のうへ	一五
少年	一五
街	一五
湖水	一六
村	一六
春	一六
林	一六
落葉	一六
峠	一六
街	一七
秋夜弄筆	一八
落葉やんで	一八
池に向へる朝餉	一九
冬の日	一九
鴉	一九
庭	二〇
夜	二〇
庭	二〇
庭	二〇
鳥語	二二
草の上	二二

測量船拾遺

僕	二二
草の上	二二
燕	二二
鹿	二二
蠶	二二
MEMOIRE	二二
Enfance finie	二六
アヴェ・マリア	二六
雉	二六
菊	二七
十一月の視野に於て	二七
私と雪と	二七
郷愁	二六
獅子	二六
パン	二九
祖母	二九
短唱	二九
魚	三〇
王に別るる伶人のうた	三〇
夕ぐれ	三一
ニーナ	三一
物語	三一
夜	三一
私の猫	三一
失題	三一

詩集 南窗集

黒い旗	三三
梢の話	三三
昨日はどこにもありません	三三
水のほとり	三三
あとがき	三三
鴉	三五
湯沸し	三五
静夜	三五
蟋蟀	三五
信號	三五
椿花	三五
ブブル	三五
遅刻	三六
節物	三六
家・鴨	三六
蟹	三六
鶴 鴿	三六
馬	三六
友を喪ふ	三六
首途	三六
展墓	三六
路上	三六
服喪	三六

詩集 閒花集

牝雞	三六
牛	三六
旅人	三七
鹿	三七
土	三七
路傍	三七
露れ	三七
旅舎	三七
開庭	三七
黒蟻	三七
夕焼	三七
病床	三七
本	三七
蠶	三七
街道	三八
裾野	三八
砂上	三八
鶯	三八
晝の月	三八
路傍の家	三八
理髮店にて	三八
工場地帯	三八
漁家	三八
平津	三八

村の大	元
揚げ雲雀	元
一家	元
厩舎	元
新緑	元
チュウリップ	元
百舌	元
水村	元
午前十時	元
藤浪	元
桃花源	元
吟詠	元
春日	元
庭前	元
椎の蔭	元
鐵橋の方へ	元
朝	元
晩夏	元
蟬	元
蛇	元
ある寫眞に	元
新秋	元
黄葉	元
空山	元
夜明けのランプ	元
夜の部屋	元
空林	元
瀧	元
一つの風景	元

雄	三
頰白	三
早春	三
雪景	三
雉	三
千曲川	三
「檸檬」の著者	三
鞍部	三
訪問者	三
故郷の街	三
鯉	三
仔羊	三
雷蝶	三
海邊	三
黎明	三
啞蟬	三
鮎	三
燈下	三
同花	三
石榴	三
一隅	三
黄葉	三
日白	三
掠鳥	三

詩集
山果集

薊の實	三
白薔薇	三
繡眼兒	三
薔薇	三
一枝の梅	三
白梅花	三
白梅花二	三
途上	三
紅梅花	三
微雨	三
晴天	三
皿の中の風景	三
猫	三
古帽子	三
熊の膽賣り	三
山鳩	三
黃鶯	三
日没	三
送水管	三
木兔	三
蠅の羽音	三
初夏	三
鯉織	三
向ひの山	三
山麓	三
丘の上	三
水聲	三
日まはり	三
旅人	三

測量船

霧	三
鐘	三
鴉	三
自畫像	三
機關車	三
牛ぐるま	三
金星	三
大阿蘇	三
とある小徑	三
静夜	三
羽子霞子	三

詩集
春の岬

微風	三
鳴鳥	三
火ノ見	三
白桔梗	三
山泉	三
雨後	三
新月	三

序詩	三
----	---

南窗集

閑花集

山吳集

詩集
艸千里

枕上口占

又

蟬

南の海

涙

紅花一輪

赭土山

艸千里濱

水邊歌

*故き胡弓

新雪

慶園

鷗

あられふりける

あられふりける

とほきことのは

鷗どり

桐の花

汝の薪をはこべ

書月

書月

花間口占

又

*おんたまを故山に迎ふ

列外馬(原題「駿馬」)

詩集
一點鐘

一點鐘二點鐘

木兎

海大章

ある橋上にて

波

貝殻

既に鷗は

この浦に

重たげの夢

鷗どり

夏艸

この朝

志おとろへし日は

梅さきぬ

いつしかにひさしわが旅

淺春偶語

浮雲一片

閑雅な午前

山上の鷗

昨日は冬

家庭

獨樂

*樹下石上

風蕭々

水聲

毀れた窗

謎の音楽

灰色の鷗

海四章

馬車

蟬

沙上

わが耳は

夜地震す

鷗林口誦

丘上吟

路傍吟

冬の日

*あはれよしわれらの國は

*南の海

朝菜集自序

一の歌

春の岬・乳母車・雪・甃の
うへ・湖水・池にむかへる
朝餉・鴉・夜・鳥語・僕
は・燕・アヴェ・マリア・
私と雪・郷愁・獅子・パン

二の歌

鹿・土・チューリップ・藤
波・椎の蔭・鐵橋の方へ・
仔羊・黎明・蛭蟬・薊の實
・皿の中の風景・日まはり

三の歌

とある小徑・靜夜

四の歌

蟬・涙・岬千里濱・あられ
ふりける一・あられふりけ
る二・とほきことのは・桐
の花・おんたまを故山に迎
ふ・秋日口占・かつてわが
悲しみは

五の歌

・志おとろへし日は・閑雅な
午前・鶴林口誦・丘上吟・
路傍吟・風蕭々・水聲

六の歌

白梅花……………七五
白梅花又……………七五
月天心……………七五
山青し……………七五
富士とほく……………七六
桃花李花……………七六
くさまくら……………七六
春老いし庭……………七六
曲浦吟……………七七
山峡口占……………七七
扁舟歌……………七七
碗の花……………七七
羈旅十歳……………七八
師よ 萩原朔太郎……………七八
途上即事……………七八
鐘鳴りひ……………七八

艸千里

艸千里拾遺

海 よ……………八〇
日まはり……………八一
秋日口占……………八一
老いらくの身をはるばると……………八一
世はさながらに……………八二
海から昇る太陽……………八二
かつてわが悲しみは……………八三

一點鐘

合本一點鐘あとがき……………八三

花 筐

遠き山見ゆ (序にかへて)……………八四

たまきはる……………八四
れむの花さ……………八四
時世をふれば……………八四
かへる日もなき……………八四
しろくすずしく……………八四

命つたなき……………八四
青くつめたき……………八五
けふはわが背の……………八五
夏の日の……………八五
明日は死ぬ人のやうにも……………八五
城はやぶれし……………八五
けふも旅ゆく……………八五
またある時は……………八六
またある時は……………八六
ひとつうれひに……………八六
くさの庵の……………八六
水仙の香や……………八六
葉ずるをわたる……………八六
かよい花……………八六
*人の世よりも……………八六
あるは丘べを……………八六
軒端の雨も……………八六
庵のあるじが……………八六
桃の花さく……………八七
桃の花さく……………八七
ちちと啼きしは……………八七
水のほとりに……………八七
すずしきうなじ……………八七
山なみとほく……………八七
おもきうれひを……………八七
桃の畑の……………八七
風にさゆらぐ……………八七
みちゆく人は……………八七
沖の小島の……………八七

いそぎの用の……………八七
うれひをしらぬ……………八七
*さばてんの花・まろうどの……………八七
・みちのべに・本屋の息子……………八七
のろの仔鹿の……………八八
艶にすぎたる……………八八
いまこの庭に……………八八
たんば深……………八八
いにしへの……………八八
いのちひさしき……………八八
阿夫利の山に……………八九
牛のまなこも……………八九
*そのパレットを……………八九
泰山木の……………八九
朴の花……………八九
そらはひととき……………八九
艸の庵に……………八九
訪ふ人なしに……………八九
野のわる狐……………九〇
またある時は……………九〇
ひななる花の……………九〇
霜むらさきに……………九〇
旅路はるけき……………九〇
人をおもへば……………九〇
わが名をよびて……………九〇
黄金のいろに……………九〇
君こを……………九〇
ひさかたの……………九〇
明日をまつ……………九一

はるかなる	九一
うかりける	九一
もろともに	九一
あはれしる	九一
なほよべの	九一
もののはな	九一
ころざし	九一
ほととぎす	九一
旅びとの	九一
はつ夏の	九一
さやさと	九一
うき人は	九一
艸のまに	九一
日まはり	九一
夕立のとほりすぎた	九一
うせてのち	九一
宋の世よ	九一
秋風に	九一
あはれこは	九一
朝ごとに	九一
茶の花の	九一
宵月夜	九一
身は老いて	九一
陽なく	九一
願はくば	九一
うつつを遊と	九一

詩集 故郷の花

薦なく——序に代へて 九四

すみれぐさ	九四
春の旅人	九四
をちかたびと	九四
春のあはれ	九四
空 琴	九四
みづにうかべど	九四
浮 雲	九四
ふらここ	九四
白き墓地	九四
朝はゆめむ	九四
秋の風	九四
回花譜條	九四
なれは旅人	九四
時雨の宿	九四
あきつ	九四
雲と雁	九四
蟋蟀	九四
朝の小雀女	九四
艸 紀	九四
きつつき	九四
*さくらしま山・窗下の海	九四
池あり墓地あり	九四
丸木橋	九四
花筐拾遺 二章	九四

いんげんの花

青葉がくれに (原題「椿の花」)

乙酉即事 一〇〇

何なれば 一〇〇

島崎藤村先生の新墓に詣づ 一〇〇

池のほとりに柿の木あり 一〇〇

歸らぬ日遠い昔 一〇〇

涕淚行 一〇〇

荒天薄暮 一〇〇

海邊哀唱 一〇〇

横笛 一〇〇

詩集 砂の砦

胡袂讃 一〇六

一葉舟 一〇六

*水の季節 一〇六

涙をぬぐつて働かう 一〇六

古松に倚る 一〇七

竹の青さ 一〇七

郊野の梅 一〇八

*断章 一〇八

赤き落日にむかひて 一〇八

水仙花 一〇九

荒磯 一〇九

雪はふる 一〇九

砂の砦 一〇九

宵宮 一一〇

この花 一一〇

薪を割る音 一一一

陶の世 一一一

空青し 一一一

やがて日暮れは雨となる 一一一

春の日の感想 一一二

*一筆啓上 一一三

花の木かげ 一一三

桃花流水 一一三

梢の空 一一三

鳴け 田螺 一一三

沖の鳥 一一三

*水ぐるま 一一四

馬鹿の花 一一四

海は今朝 一一四

夏の祭 一一五

梢の花 一一五

霧ふかし 一一五

詩集 日光月光集・上巻

測量船 より

・春の岬・乳母車・雪・髯のうへ・少年・潤水・村・村

・落葉・池に向へる朝餉・
冬の日・鴉・庭・夜・庭・
鳥語・草の上・僕は・燕・
鹿・夜・アグエ・マリヤ・
雉・菊・私と雪と・郷愁・
獅子・パン

測量船 以後

・鐘・鴉・機關車・牛ぐるま
・大阿蘇・とある小徑・靜
夜・烟子霞子

南窗集

閑花集

山果集 より

・友を喪ふ・鹿・土・猿の月
藤浪・椎の蔭・鐵橋の方へ
・頰白・「鸛嚙」の著者・
訪問者・雷蝶・海邊・旅人

艸千里 より

・艸千里濱・枕上口占・又・
蟬・南の海・涙・紅花一輪
・緒土山・あられふりける
一・あられふりける 二・
とほきことのは・鷗どり・
桐の花・汝の詩をはこべ・

晝の月・晝の月又・花間口
占・又・海よ・日ははり・
秋口口占・老いらくの身を
はるばると・世はさながら
に・海から昇る太陽・エビ
ローグ

一點鐘 より

・一點鐘二點鐘・木兎・海六
章・鷗どり・夏艸・この朝
・志おとろへし日は・浮雲
一片・閑雅な午前・山上の
鷄・昨日は冬・家庭・獨樂
・風蕭々・水聲・毀れた窓
・灰色の鷗・鷄林口誦・丘
上吟・路傍吟・冬の日

詩集 日光月光集・下巻

花 簍 より

・遠き山見ゆ・ねむの花さく
・時世をふれば・かへる日
もなき・しろくすずしく・
命つたなき・青くつめたき
・夏の日の・明日は死ぬ人

のやうにも・けふも旅ゆく
・またある時はわが宿を・
またある時は野にいでて・
ひとつうれひに・くさの庵
の・水仙の香や・あるは丘
べを・かよい花・軒端の
雨も・庵のあるじが・桃の
花さく艸の戸に・桃の花さ
く裏庭に・ちちと啼きしは
・水のほとりに・すずしき
うなじ・おもきうれひを・
桃の畑の・みちゆく人は・
沖の小島の・鹽にすぎたる
・いまこの庭に・いにしへ
の・いのちひさしき・艸の
庵に・泰山木の・旅路はる
けき・人をおもへば・わが
名をよびて・君こそを・は
るかなる・うかりける・も
ろともに・あはれしる・も
ものほな・こころざし・ほ
ととぎす・はつ夏の・艸の
まに・うせてのち・宋の世
よ・願はくば

故郷の花 より

・乙酉即事・鳶なく・すみれ
ぐさ・春の旅人・をちかた

びと・春のあはれ・空琴・
みづにうかべど・浮雲・あ
かね雲・あきつ・秋の風・
回花蕭條・なれば旅人・時
雨の宿・雲と雁・朝の小徑
女・艸枕・きつき・何な
れば・池のほとりに柿の木
あり・荒天薄暮・横笛

砂の砦 より

・胡桃殻・一葉丹・赤き落日
にむかひて・水仙花・荒磯
・雪はふる・砂の砦・宵宮
花の木かげ・薪を割る音・
この花・春の日の感想・桃
花流水・梢の空・馬鹿の花
・鷗・海は今朝・梢の花・
夏の祭・霧ふかし

雁と落葉 より

長江に舟を泛べて……………二六
はまひるがほ……………二六
北の國では……………二七
あねむり椅子……………二七
秋庭飛花 一……………二七
秋庭飛花 二……………二七
鷺……………二八

松の梢	二八
陶のそめ繪	二八
瓦全	二八
さるすべり	二八
しぐれの雨も	二九
ひとり能なき	二九
霞うつ	二九
沖ゆ來て	二九
わが庭の	二九
霞ふる	二九
先生	二九

詩集 朝の旅人

- 花 筐
- 故郷の花
- 砂の砦

詩集 駱駝の瘤に
またがつて

- 水光微茫

駱駝の瘤にまたがつて	二三
鴉	二三
薄 野	二三
二重の眺望	二三
旗	二四
晩 夏	二四
遠くの方は海の中	二五
なつかしい斜面	二五
けれども情緒は	二六
ここは東京	二七
いただきに煙をあげて	二七
行人よ靴いだせ	二七
霜の聲	二八
さやうなら日本東京	二九
ちつぽけな象がやつて來た	二九
王孫不歸	二九
加佐里だより	三〇
秋だから	三〇
驢 馬	三二
すずしく青き	三二
水光微茫	三二
かなたの梢に――	三二
すずしき颯	三三
秋風裡	三三
晝の夢	三三
海にむかひて	三三
はまひるがほ	三三

落日	一三
・秋庭飛花	一三
蜚女のほそ路	一三
雨の鳩	一三
わが手いま	一三
夏の日なれば	一四
秋風裡	一四
・陶のそめ繪・長江に舟を泛 べて	一四
水 鷄	一四
海鳴り	一四
一炊夢	一五
喪服の蝶	一五
藍にけむれる	一五
ひととせふれば	一五
散文詩 四篇	一六
沈 黙	一六
出 發	一六
係 蹄	一六
狼	一六
閑人斷章	一六
秋風に	一六
馬おひむし	一六
・さるすべり	一六
時雨 四章	一六
花木檀	一六
村 雨	一六

・しぐれの雨も・ひとり能なき	一三
爐邊 四章	一三
くれなるの	一三
いとはやく	一三
わがうたを	一三
又	一三
殘紅 四章	一三
殘 紅	一三
くつわ蟲	一三
鉦たゞき	一三
燈 下	一三
・急霰 四章	一三
霰うつ・沖ゆ來て・わが 庭の・霰ふる	一三
村酒雜詠	一三
日もくれぬ	一三
遠 は	一三
爐に臥して	一三
月山の	一三
いささかの	一三
帽をうつ	一三
死後の名は	一三
桐花 四章	一三
門を出て	一三
春たけて	一三
蜚女の焚く	一三
丘のべに	一三

山みな白し……………	110
春といふ……………	110
彌生盡……………	110
冬のもてこし……………	111
閑人斷章……………	111
パイプ……………	111
日暮れの海……………	111
某日……………	111
松葉艸……………	111
くさの實の……………	111
ひとむなしく……………	111
故をもて……………	111
祕所……………	111
花のたね……………	111
あとがき……………	113